
落書き日記

生野紫須多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落書き日記

【コード】

N5598I

【作者名】

生野紫須多

【あらすじ】

詩とかポエムとかセリフとか、あと歌詞とか。

落書き0001 - 0005

0001

あの日の私はもういない
今日の私は私ではない
願う日の私はここにはいない

いつの日か 私が私であるように

0002

現状を取り巻くすべての感覚が
我が脈動を締め付ける
渴ききつた叫びは空虚に響き
断罪の鎖は魂の牢獄と化してなお
その歩みを止めはしない
もはや、逃げ道など何処にもないのだ

0003

僕たちは美しい
それは鏡には映らないけれど
掬い上げた掌から
零れ落ちた雫はきつと
まだ誰も知らない色をしている

0004

私は 　　ただそう在りたい

0005

沈まぬ太陽の傍らで 世界は既に色褪せていた
彷徨う月に照らされて 私の影は輪郭を失ってゆく

暗い暗い鏡の中で 私は一人夢を見る

空と海との境界線で 佇む距離も知らぬまま
流れ星は涙を落とす 鬘を籠に抱かれながら

夢から覚めた夢の後も 私は探し続けるのだろう
過去が私を追い抜いていく その時まで

落書き0006 - 0010

0006

歓声が、混乱が、恐怖が、
俺達をのみ込んでいく

0007

言葉が欲しい

何処かにあるはずの

私がなくしてしまったもの

ずっと、私が探し続けているもの

0008

降りかかる微熱の吐息は
直視できないキミへの贖罪

口づけで始まる

0度から180度の奇蹟

降りそそぐ魅惑の瞳は
抑えきれないボクへの引き金

抱きしめて果てる

180度から360度の奇蹟

0009

私が魅かれているもの

0010

ありふれた言葉より ただ私でいただけ

わたしの匂いと、息遣いと、体温と、表情と、

ほんの少しの不安で紡ぐ小夜曲^{セレナーデ}

彩るのは 一夜限りの叶わない夢物語

ありふれた想いより ただあなたといたいだけ

あなたの匂いと、息遣いと、体温と、表情と、

ほんの少しの期待で綴る交響曲^{シンフォニー}

欲しいのは たった一度の叶わない夢物語

落書き0011 - 0015

0011

泣いたのは 君だった

琴線に触れた滴

その涙の価値を僕はそれまで知らなかったから

0012

飛べない翼で羽ばたいてみる

それでも空を飛びたいと 思っているから 願っているから

0013

雨が降るのは雲が泣いているから

雲が泣くのは空を隠してしまうから

雨はやがてひとつに集まって空を映し出す

雲はそれを見てもう一度だけ泣く

雨は泣いてくれた雲のために空へと虹を架けるだろう

0014

夕陽に染まった君の横顔も

二人を繋いだ手の温もりも

あの日君と交わした約束も

忘れないように刻みつけて

0015

此処に居たい？ 何処かへ行きたい？

場所は関係なくって
時間も関係なくって

君がどれだけ変わってしまったても
また二人で笑って話せるなら問題はないんじゃない？

0016

それでも、信じたいんだろう？

0017

僕は弱いから、僕が傷つかないように強さを欲する。

私は弱いけど、誰も傷つけないように優しさを欲する。

我は弱い也なりに、汝を傷つけようとも癒せる心を欲する。

0018

僕は生まれた時から知っている。

この世界がこんなにも残酷であることを。

大好きだった人と離れ離れになった。

自分は泣くことしか出来なかった。

何よりそんな残酷な世界が許せなかった。

だから僕は泣きながら誓ったんだ。

産声は全てに対する宣戦布告。

そう、その時から僕はこの世界の敵だった。

0019

天国に逝ったら、俺はそこで俺の城を建てようと思う

地獄に逝ったら、俺はそこで俺の城を建てようと思っ

0020

願え、然さすれば叶わん

落書き0021 - 0025

0021

毎夜奏でる狂詩曲
ラフンデュー
あまね 遍く全てを手に入れたい

愛しても足りない
狂っても足りない
貴方だけ足りない

0022

嗚呼、続いてゆく
始まりも終わりもなく
ただ在るだけのものを胸の中に詰め込んでゆくように

0023

夢見た場所は理想の世界
答えなんてもういらぬ

僕は君の傍にいて君を感じているから
君は僕の傍にいて僕を感じてくれるかい？

0024

宙を眺めて炎を灯す
そら
悲しみを滾たぎらせるのなら星を見上げよう
世界中のどんな悲惨さえも見過ごす事が出来ないならば

その星はどれだけのものだろう
その炎はどれだけのものだろう

0025

痛みならもう少しだけ耐えていける
きつと明日もまた朝日が見えるはずだから

落書き0026 - 0030

0026

君は過ぎ去った百年を想い口吟む

過ぎ去る哀しみも憎しみも
忘れ逝く楽しみも愛しさも
全てを繋いで君は音に認め

なら僕は来たる千年を祈り口遊もう

何れ来る喜びもトキメキも
舞い過る寂しさも切なさも
全てを絡めて僕は音に認めよう

0027

ひとつだけ願い事が叶うとしたら
そんな幻想を抱いてひとり眠り続けていたい

0028

薄暗い深遠の彼方から粉雪が街路に降り積もる
通り過ぎた街路樹に息吹が萌す事も無いように
凍てつく冬の残り香が枯れるまで続いてゆくだけ

深々と 延々と 刻々と 綿々と 淡々と 洋々と 津々と

0029

貴方が何かを信仰すると云うのなら

それが形のない支えだと云うことを知らなくてはならない

貴方の信仰心が貴方の行動によってしか示せないのは

それが神だろつと何であろつと

貴方は自分の行動に因ってしか何かを得ることはできないからだ

0030

これ程までに疑り深い僕らに必要なものは、やはり言葉しかないの
であろつ。

0031

私は人魚。

人なのか魚なのか。

海の底に住んでいる。

泡沫うたかたに消えてゆく。

私は人魚。

0032

目の見えてない君は何が見えている
耳が聴こえない君は何を聴いている
味が分からない君は何を感じている
匂いを感じない君は何を感じている
体が麻痺してる君は何を感じている

0033

誰だって独りだ。

私は貴方の考えていることが分からない。
貴方も私の考えていることは分からない。

いくら解かり合えたと思っても。

いくら解かり合えたと思っても。

本当の処は誰も判らない。

私は独りだ。

それでいい。

絶対に解かり合えないと分っているから。

だから私は貴方と一緒に居ることにする。

解からないから。

聞いてみる。

触ってみる。

愛してみる。

貴方を解かろうとしてみる。

0034

俺が偽物だとしても。

俺が本物だとしても。

それが、俺である理由にはならない。

久しぶりに兄さんに会いに行った。

僕らの顔は全然似ていないけれど、それでも双子なんだと云う。

勝手に玄関を開けて中に入ると、居間で兄さんがテレビを見ていた。

「久しぶりだね、兄さん。元気にしてた？」

「ああ、おまえか」

最近会っていなかったと云うのに、兄さんの返事は少ない。

こういう会話の端々にも、僕ら双子の性格が表れているらしい。

兄さんは淡泊だ。それは僕が子供の頃から変わっていない。

物事に対する執着心が、人よりも少ないのだと僕は思っている。

「何を見てるの？」

兄さんの視線の先には、二人の赤ん坊が映っていた。

病院のベッドの上で二人して遊んでいる。不思議と初めて見た気がしない。

「これは僕達の……？」

「俺はもう覚えていないがな」

どうやら画面の中で遊んでいる赤ん坊は僕達のようにだ。

でも映っている赤ん坊は、どちらも同じ顔をしていて見分けがつかない。

「撮っているのは母さん？」

「……………」

兄さんはじつと黙ってビデオに見入っている。

僕の質問に兄さんは答えてくれなかった。

それは答えを知らないからなのか、ビデオに集中しているからなのか。

僕も黙ってそれを見ていると、やがてビデオも終わりに近づく。

二人の赤ん坊の内、奥に映っていた方がこちらに気付いて手を止める。

画面はその赤ん坊のアップになった。

真黒で純真な瞳が大きく見開かれて、画面の一点が映える。

プツ、つとそこでビデオが途切れた。

場面は砂嵐に変わり、スピーカーからは不協和音が奏でられる。

「どうして見てたの？」

そんな疑問が口に出たのは、当然のことだったと思う。

ただその時僕は薄ら寒い予感に捉われていた。

だから、本当は聞くべきではなかったのかもしれない。

「死んだんだよ」

えっ？

その意味が分からず兄さんを見やる。この時初めて、僕と兄さんの目が合った。

0036

騙されるな。

奴はそんなことを望んではない。

騙されるな。

奴は天国を創りたかったのではなく、地獄を創りたかっただけだ。

騙されるな。

奴等は、悪魔のような知恵をしている。

0037

偶然のような必然

君は目を見開き、そこで呼吸する

朝目覚めて、何かが起こる

それはきつと、起きるだろう

やり直しはきかない、たった一度だけの必然

繰り返される必然

誰も知らない偶然

だからきつと、どちらでも同じだ

0038

いつもとは少しだけ違う朝。
だから、これは、たとえばの話。

0039

夢を見た。

空を飛ぶ夢。

背中に翼が生えて、その翼で羽ばたく。
足は地面を離れて、体は宙へと浮かぶ。

どンドンどンドン、上を目指して。
だんだんだんだん、空へ近づいて。

飛び続けて気付いたことは。

果てしなく続く空。
どこまでも続く宙。

いつの間にか、目的は変わる。
いつの間にか、理由が変わる。

どこまで行けばいい。

終わるのは何時か。
諦めるのは何処か。

ああ、どこまでも、どこまでも、おちていく。

夢を見た。

空を飛ぶ夢。

0040

一つ、純白の翼は至高の頂き、他の追隨を許さぬ孤高への飛翔。

二つ、銀幕に躍る幻影、そこは最も強き者共の集う場所。

三つ、黄金の杯さかずきに誘惑しんごくの調しらべ、重さを伴った煌きを残して。

四つ、紅月に映る、虚構と欺瞞を塗り替える勝利の美学。

五つ、深緑に潜む茨の古城、覚悟無き者を傷つける棘とげとの邂逅かいこう。

六つ、蒼穹に浮かぶ雲のように、形を失くしたあの空のように。

七つ、虹色に輝く道標、誰もが羨む桃源郷への想いを架けて。

八つ、亜麻色に染まる、魅惑の香りを靡なびかせた髪と海と夜と。

九つ、黒金くろがねの龍に護られし最古の墓場、夢の後に築かれる最後の砦。

落書き0036 - 0040 (後書き)

次から10個ずつで

0041

夜空を切り裂くあの星の欠片みたいに この身一つで駆け抜けていく
例え燃え尽きて消えてしまつとしても その速さで飛んでいきたいの

0042

君の愛でありたい。

求める物は愛でいたい。

夢でも現でもその全てを信じたい。

生まれてから死ぬまでを在るがままに委ねたい。

0043

自分の自由さえ投げ出して 嫌いになるまで笑っていて

0044

2298年、十の暦。

南の空に彼願ひがんの兆流が現れる。

その時、火網に残された人々は月の災厄に晒されるだろう。

避ける術は無く、また耐える術も無い。

翼を持たぬ神人は地に縊すがりつくことで生き永らえるのだ。

0045

絶望には希望が必要だ。

絶望するには希望が消えるまで信じ抜くしかない。

希望には絶対がない。

全ての希望は可能性という数字によって裁かれる。

0046

斬る

触れるものを

近づくものを

邪魔なものを

何の意味も無く

何の理由も無く

何の制約も無く

その純粋な鋭さで

その真剣な閃きひらめで

その刹那の一瞬で

刃じんを経て 残ざんを断つ

0047

乙夜いじやに弔ひびくい 身命しんみょうに処しよす

0048

ずっと問い続けていた。

自分にも。

誰かにも。

世界にも。

答えなどないと知りながら。

納得できないと知りながら。

それでも、問い掛けずにはいられない。

然したる思いは、まだ万華鏡のように揺らめいている。

0049

余計な御託はもう十分。

無理は承知、無茶は当然。

元々、此処はそう云う処だ。

心と一つと体一つ。

それだけあれば、足掻くくらいはやってやれるぞ。

0050

その獯猛で堅強な野獣に似て

孤高を愛して群れは好まず

一度敵を射抜けば一切の容赦はしない

己の爪牙さえも惜しげもなく振り翳すその様は

荒ぶる猛虎をその身に宿した美しい獣と化す

落書き0051 - 0060

0051

僕はいつでも自然体でありたい。

たとえどんな事が起きようとも、その揺るぎない総身で受け止める。

人としての感情と理性の境で、心の趣くままに僕は在りのままで居たい。

0052

この気持ちを忘れない

0053

世界の果てを目指している

誰も知らない、誰も居ない場所への逃避行

世界の終わりを感じている

地獄のような、楽園のような終末への階段

世界の全てを知ってみたい

独善たる狂信と渴望の、辿り着いた到達点

0054

斜泛が揺れる
シャボン

七色の感情で包む

夢の中へと引きこんでいる

誰にも触れない斜シヤボン泛玉だま

だから、最後まで見つめていて

0055

小雪こゆきのように淑しとやかに。

粉雪こなゆきを孕はんだ可憐かれんさで。

白雪しらゆきに覚めるほど麗うつくしく。

細雪こゆきが流した清きよらかさに似て。

深雪みゆきへと続く道で深玄しんげんに咲き誇る。

其処は、雪華せつかの花園にして百花繚乱ひゃっかりょうらんの銀世界。

0056

そう在ることで私になる。

私に敵う者などいなかった。

この指と引き金で呼吸する。

お前を撃ち抜くことしかできない。

0057

この先の向こう側 きっと待つその場所へ
足音は響き渡る 此方こなたより彼方かなたまで

0058

それが奇跡ではないと云うのなら。

もし、これが愛ではないのならば。

いったいこの空の、どれだけの光が消えるだろう。

0059

どれだけ待っても待ち人はこない。

あれから、どれほどの時間が経ったのだろうか。

冷たい夜はその身を引き裂き、心はやがて摩耗してゆく。

なんとなく上を見た。

凍てつくような風に、何枚かの葉っぱが付き従う。

ふうーっと、息を吐いた。

吐いた息は白くなって、風と一緒に溶けていった。

この最後に残る木の葉が散ってしまったら。

そんな言葉が自然に浮かんだ。

その時は、諦めよう。

軋む老木に凭^{もた}れ、どこか遠くを見つめながら、もう一度息を吐いた。

0060

どれだけ祈っても体は動かない。

あれから、どれほどの時間が経ったのだろうか。

冷たい夜はその身を引き裂き、心だけが焦ってゆく。

後悔だけが浮かんできた。

凍てつくような風に、自分の無力さを思い知らされる。

ふうーっと、体が軽くなった。

そのまま体は浮き上がり、風と一緒に溶けていった。

早く、早く、会いに行かないと。

そんな言葉に突き動かされていた。

待っていてくれ。

軋む心に、たった一つの想いを乗せて、もう一度駆けだした。

落書き0061 - 0070

0061

憧ればかりが先立って

理想はもう私の手には届かない

上を向いて追いかけてみても

行く当てもないままにただ月を見て彷徨^{さまよ}うだけ

夢の中で願った星も

気付かれることなく旅立って

せめて生まれ変わる前に

ひとつだけでも奇蹟を掴んであの月に捧げよう

0062

きつとそれが見たくて扉を敲^{たた}いたんだ。

僕は傷つき、君もまた傷ついたけれど。

誰かに止められようともたぶん無理だった。

もう一度やり直せたとしても、僕は同じことをするはずだから。

もう何もかもを見たくなくて扉を敲いたんだ。

追いかけてきた暗闇に、捕まったけれど。

一番伝えたいことを僕は知ることができた。

もう一度君に伝えたくて、また僕は逃げ出そうとしている。

失くした物を見つけようと扉を敲いたんだ。

思わず重ねた唇に、見落としていたけれど。

僕を支えていた全てを蹴飛ばして駆けていった。

もう一度君と会いたくて、まだ僕はそれを探し続けている。

0063

君の笑顔がこんなにもトキメクのは
僕にとつても不思議な事だけど
眩まぶたしすぎる君の横顔に僕は侵まされていく

君の笑顔にこんなにも夢中なのは
僕が君に恋してるように思えて
その何気ない君の仕草しぐさに僕は毒どくされていく

呆れた顔も怒った声も
僕が君に振り回される度が変わっていくのも
嬉しいと思ってしまう僕は自分を疑うけれど

君の笑顔でこんなにも苦しくなるのに
僕はすっかり参まっている訳で
蕩とろけるような君の瞳まなこに僕は攫さらわれていく

0064

夕暮れに染まそっていく

赤色は冷たく校庭に溶けて

重たい黒色が押し潰つぶされる

空を落ちた羽根

天使は翼よくを殺そがれて飛んでいく

0065

“ I ' m a F a k e r ”

0066

運命など取るに足りない問題だ。

それが俺にどう影響しようとも。

俺のやることは何も変わらない。

0067

少しずつ壊れていくこの世界で

僕らは今日も日々を過ごしている

果てしない狂乱が暗闇に渦巻いても

それに気付くことさえできやしない

僕には君の壊れそうな瞳にも答えてやれない

0068

何度でも言っただけ

他には何もいらなから

ずっとこのまま一緒にいて

0069

銀奥の隅に掠めた想い
一秒よりも短い時間

貴方への気持ちを隠すような
戸惑う視線に早く気付いて

私はもうこれ以上近づけない
だから貴方から心に触れて

0070

傾いて 彼願ひがんの塔

落書き0071 - 0080

0071

ふと足を止めて、振り返ってみる。

心の光を頼りにやってきたけど。

足跡はもう追えなかった。

忘れものはなかっただろうか。

どこかに分かれ道はなかっただろうか。

答えはわからない、この道の先に辿り着くまで。

0072

おはよう

君の言葉はいつも宝石のようで

おやすみ

その声をずっと聞いていたんだ

0073

ハレルヤ

Hallelujah!

このしみつたれた世界へようこそ！

0074

懐かしい日々

思い出は色褪せて

俺達は遠くもう戻れない

0075

わかってる。

痛いのも、苦しいのも。

みんな全部、わかってるけど。

それでも、僕はやりたい。

0076

僕らは出会ったから。

泣き言も言えるし、喧嘩して笑い合える。

僕らは似たもの同士だから。

馴染めないこの街でも、歩いていける。

僕らは仲間だから。

たとえ裏切られても、またいつか出会える。

0077

蒼く霞む夜は

儂くも鹹^{から}い君の思い出に酔いしれている

黒くくすむ夜は

膝を抱えて君との約束を嘆き悲しんでいる

0078

篝火かがりびのようなひと夏。

黄昏たそがれに、金魚すくいに、線香花火。

夕風ゆづなせに、浴衣姿に、蝉時雨せみしぐれ。

小さな庭にわに向日葵まひまひを植えた、夢ゆめのような一時ひととき。

0079

好きだから、何でもしてあげたいと思う。
好きだから、許せないこともあると思う。
好きだから、憎んでしまうものだと思う。
好きだから、許せてしまうものだと思う。
好きだから、愛したいし、愛して欲しい。

0080

初めから、それは宿命だったのかもしれない。
日増しに大きくなっていくその影に怯えながら、私は日々を耐え忍んでいる。

初めから、それは避けられなかったのかもしれない。
その影はいつか私を食い破ろうと、今も確実に私を蝕ほしむんでいく。

初めから、それはそう云うものだったのかもしれない。

私は私であろうと、ただ無駄な努力に明け暮れているだけなのかもしれない。

初めから、それはわかっていたことなのかもしれない。

私はいよいよ、その影の貌かたちを目撃することになるだろう。

初めから、それは私の中に存在していただけかもしれない。

何故私なのか、何故私でなければいけなかったのか、それだけが知りたい。

初めから、それは例えようも無く私でしかなかったのかもしれない。どうすればいいのか、どうしようもないのか、私にはもう時間がない。

初めから、それは私になるために生まれてきたのかもしれない。この私が私でないと証明することは、どうやら私にもできそうにない。

落書き0081 - 0090

0081

悪魔に堕ちても貫けるか？

天使を殺しても貫けるか？

0082

私の物になりそうにない貴方が好き。

0083

やがて偶然が終わり、たった一人の旅が始まる。

誰も待つてくれなくて、自分でももう止まれなくて。

誰も知らない僕だけが、僕の知らない君の瞳に映っている。

0084

罪が私を裁く

禁じられた法に触れたからだという

神が定めた法

それを証明するのは人が定めた法

罰が私に下る

由緒なき法に記された不問の罪状

神が下した罰

それを執行するのは人が下した罰

0085

今はもう覚えていない

純粹なまでに無邪気な笑い方を

一体何時失くしてしまったのか

幼い頃は覚えていたはずなのに

今はもう覚えていない

0086

その不幸を理解するには、君はまだ幼過ぎたのだ。

0087

ふっと風が通り過ぎる刹那。

ふっと私は肝心なことに気付く。

それはもう風のように過ぎ去ってゆくけど。

0088

真つ赤な噴火口に滾る劇薬

血よりも紅く、鉄よりも熱いその血潮は

荒ぶる俺の魂を炎玉に似た真紅に染めてゆく

0089

涙と血と雨と、後悔に染まる刃。
胸に突き刺さった剣を抜くものはいない。

0090

私は救われない

何も無いから救われない

私はこの世界に耐えられない

期待はしない

誰にも救われない

自分にも救われない

この世界は救われない

骸骨^{どくろ}が笑って骨になるだけ

救ってみせてよ

誰でもいいから救ってみせてよ

私でない誰かを救ってみせてよ

まだ希望があることを誰か教えてよ

落書き0081 - 0090 (後書き)

次で終了!

落書き0091 - 0100

0091

もう生きていけないなんて、そんな事を思ったんだ。

それが人ってやつなんだろう？

それが痛みってやつなんだろう？

結局どうでも良くなって、殻を脱ぐことにしたんだ。

0092

もう、言葉だけでは言い表せない

0093

私にとって、それは偶然だけど。

君にとって、それは当然だよな。

私はいつもそうだけど。

君はいつもそうだった。

私が思い込んでいたの？

君が信じ込んでいたの？

私には自信がない。

夢の中でも手に入らない。

君が言うには。
夢でない方にあるみたいだ。

0094

このまま、この気持ちのまま。
そっと消えてしまってもかまわない。

0095

柵しがらみに打ち勝って
禍わざわいを磨り切って

胸の天使を慰めて炎を呼び覚まそう
有り触れた日常を打ち砕く飛びつきりの美学

0096

泡、泡、沫。

ねえ、そこにいるの？

0097

それは、死神だった
それは深淵に繋がる冷たさで
私の命を刈り取ろうとしている
未練の全てを振り払って
私はその鎌を掴もうとしてみた

その温かさに震えたのは私

そうして私を包み込んでいく
それはもう逃れられない優しさで
私の命を刈り取るうとしている

最後のひと押しは死神だった
迷っていたのに、見失っていたのに
私の我儘も諭わがままされてしまう

光を奪って自由を奪って
全てを奪った死神は最後に安らぎを与える
それは一番欲しかったものなのに
他の皆と一緒に感じたかったのに

私はそれで満足してしまう
ありがとう、死神に向けて
さよなら、と微笑んでみる

0098

あなたのことは確かに好きだけど
あなたが私に期待してることは諦めるべきよ

綺麗な指先で奏でた白線のリズム
その甘ったるくて何気ないメロディーが好き
あなたのことは確かに好きだけど
あなたが思っているような私は嫌いよ

部屋の中から響いてくる鎮魂歌

その傷跡を舐めまわすような弾き方が好き

あなたのことは確かに好きだけど

愛する時間はきつとあなたより短いはずよ

作り上げたものを壊した旋律

その音でも音楽でもない音色が好き

0099

今いる場所からさよならを告げよう。

踏み出した足元から、そつと世界を離れていく。

0100

俺は女神だけを愛している

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5598i/>

落書き日記

2010年10月10日20時26分発行